

*「ボレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



注 国策におもねった地裁の「不当判決」

「ききやく！ききやく！」。携帯で叫ぶ記者たちが傍聴席のドアから走り出て行った。

「請求棄却」。誰もが、(マスコミや恐らく中電さえも)予想だにできなかった原告の全面敗訴。

この5年の間、原告側が積み上げてきた主張の正しさが、新しい知見や現実となって次々と裏付けられて来たにもかかわらず、裁判所の時間は5年前、いや阪神淡路大震災以前から止まったままだったのではないかとさえ思った。

今回の判決内容は、真理と道理をねじ伏せ、無理矢理「現状維持」をひねり出したとしか言いようのないものだ。新聞各紙も翌日の社説の中で、この判決への違和感を率直に書いている。

新しい耐震設計審査指針での再評価が済んでいない1、2号機の運転すらも認めたことに対しては、昨年改訂された新指針策定に関わった複数の委員も疑問を呈している。既に破綻した旧耐震指針時代の全国の原発を救済するために、国の施策といささかの矛盾もきたさないよう腐心した裁判官は、地震学をも汚辱し、真理から逃避したと言っている。

中央防災会議が広域の防災対策のために作った想定東海地震のモデルを絶対視し、その仮想的条件での浜岡地点の地震動に耐えられさえすれば良いという判決は、中部電力自身が行った耐震余裕度向上工事も、新指針での再評価【たとえば、アスペリティ(=地震の断層面上で大きな揺れを起こす場所)を浜岡の直下に置いて評価する等】も、不要なものにしてしまった。更に、国が想定する揺れ以上のものはむやみに考慮すべきでないといい、想定を超えても実際の設備の耐力には余裕があるから安全だと、根拠薄弱な主張を妄信している。

この判決に決定的に欠落しているのは、一歩間違えば取り返しのつかない惨事をもたらす原子力というものへの想像力である。いずれにせよ静岡地裁は判断した。しかし、東海地震が来なくなったわけでも原発震災の危機が去ったわけでもない。もう一つのチェルノブイリが起きる前に、私たちのやるべきことはまだ無数にある。(債権者：安楽知子) (注：おもねる…媚び、へつらうの意)



〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10
 チェルノブイリ救援・中部 代表：小牧 崇
 郵便振替：00880-7-108610
 TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)
 ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org

咲かせよう！菜の花

～大地と人々に～

11月10日 コンサートを開催しました!!



コンサートを観させてもらうことができ、本当に良かったと思います。スタッフの島田さんと京都のNGOの国際協力・環境問題をテーマにしたセミナーで知り合い、「チェルノブイリ救援・中部」の「菜の花プロジェクト」と、この日のチャリティーコンサートのことを聞きました。

開催前の準備の時間に呼んでくれていたみたいで、パネルや写真でゆっくり勉強ができました。美しいカトリック教会の階段の踊り場に、慈愛に満ちた教会の教えの額とならんで、ナロジチの子ども達の現状を伝えるパネルが置かれていました。正直、僕はチェルノブイリやナロジチがどこの国にあり、原発事故がどういう傷跡を残したかなんてよく知りませんでしたが、今回、原発事故から20年以上が経つ現在でも、遺伝や内部被曝で病気に苦しむ人々の現状を知りました。パネルや写真を眺めていたら、いつの間にか河田先生が直接お話をしてくださっていました。21年前に起きてしまった原発事故の直後に「なんとかできんものか」と研究を始められ、菜の花が汚染した土壌から放射能を吸収することを発見し、昨年、プロジェクトを始動されたそうです。NPO 法人として推進しているので利益はありませんが、苦境の人々を助けるために熱心に活動されているんだと感じました。博識と親しみやすい人柄、そして実行力に「化(バケ)学博士の鏡だなあ」と心底感心いたしました。そして、この日のチャリティーコンサートは、プロジェクトに深い理解と共感を持たれたというソプラノ歌手の後藤さんとピアノ演奏の伊藤さんによって行われました。聖マタイ教会の聖堂がほぼ埋まるくらいの人々が来場していました。ウクライナ語でウクライナ民謡を披露され、日本民謡の秋のメドレーなどのすばらしいオペラの歌声を聞かせてもらいました。国際交流や国際協力はこういうところから始まっているのだと感じました。

プログラム2では、河田先生による菜の花プロジェクトのプレゼンが行われました。この日はコンサートがメインだったので、大まかな概要のみを話されていたようですが、立ち上げから研究、交流から始動まで、大拍手モノのプロジェクトだと思いました。ナタネ油を使ったバイオディーゼルも使えるとは、まさに時代にふさわしいプロジェクトだと思います。プロジェクトは始動したばかりで、これからも大変な労力と資金が必要とされるようですが、一人でも多くの方の理解と協賛が得られることを願っております。みなさんどうぞがんばってプロジェクトを達成させてください。大変勉強になりました。どうもありがとうございました。(丹羽健治さん)

先日はコンサートに参加させていただき、ありがとうございました。地下鉄「御器所」徒歩5分という好立地の「名古屋聖マタイ教会」でのコンサート、やっぱり期待して行きましたが、期待以上でした。

第一部では、教会のステンドグラス、温かい光をバックに、後藤さんの澄んだ伸びのある

しゃる。「え!? あくびと赤点の化学と、今日の話が同じ…??」半信半疑で化学の教科書を開いてみた。ありゃ、確かにカリウムとセシウムの性質が似ていることなどなど、書かれているじゃん。へえ～化学って実はワクワクする話だったんだあ。私の人生を変えてくれた河田さんに感謝！次回は、「プロジェクト成功報告会&祝賀コンサート」ですね。(鈴木里依さん)

11月10日の素晴らしいチャリティーコンサートに立ち会うことができ良かったです。私は過去に、夢を実現するために協力者の方々によってチャリティーコンサートを開催し、支えていただいた経験があります。音楽のチャリティーコンサートを成功に導くために、協力された方々の心の温もりを感じることができました。外国語の歌の言葉の意味は分かりませんでしたが、歌声によって想像ですが、その国とか地方とかいった風土と情景が心の中で広がって、行った記憶がないのにその場所とか風景が目には浮かび、不思議な気持ちになりました。たとえば、静寂の湖の水面に波紋の一つもなく研ぎ澄まされた鏡のように、小高い丘・紅葉に色づき始めた木々が写りこんでいました。そんな風景が広がりました。放射能汚染された土地が、一日も早く除染されますことを心からお祈り申し上げます。乱文にて失礼します。(宇佐美 清さん)

コンサートに想いを込めて

(文章と話の苦手なソプラノより)

天気予報では雨とされていたコンサートの当日、いろいろな想いを抱きながらコンサートが始まりました。「チャリティーコンサートの始まりは“笑顔”で。」これが私の当日の課題でした。歌い終わった後のMCをいつも失敗する私、案の定今回は友達トークになってしまい、ちなみに別のコンサートでは泣いてしまい話にならず…。



〈伊藤美江さん(左)と後藤佳乃さん(右)〉

コンサートの途中、ライトがついたと思いつつと上をみると、教会の丸い窓から太陽の日差しが差し込んできて、幸せな気持ちになったことを覚えています。コンサートの準備から本当の意味でお役に立てるのか、終わった後でお役に立てたのかと、コンサートを終えた今も自問自答を繰り返しております。コンサートに向けたスタッフの方達のご配慮や、本番直前に戸村さんからウクライナ語の発音に関してOKをいただけたことが大変自信となったこと、積極的にウクライナ文化に触れたことなどが、強く印象に残っています。その中でも、ウクライナ語は本当に難しい言語であるとともに、大変美しい音楽的な言葉で、私にとってとても魅力あるものとなり、歌詞の出来はともかくとしても、コンサートではウクライナ独特の和音・リズム・艶のある旋律を初めて耳にされる方も多かったのではないかと思います。

音楽の役割については、モーツァルトの曲を聴かせて育てた菜の花は、放射能吸収率がアップするかもしれませんが(冗談)、コンサートをきっかけに講演会を聴かれた方たちからは“難しい話がとてもわかりやすく聞けてとてもよかった”という声をいただいております。

最後に、この未熟な音楽家の申し入れを受けていただき、コンサートの実現に至るまでの大変なご協力に、この紙面をお借りしまして改めてスタッフの皆様へ感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。地球の平和を願って。(後藤佳乃)

クリスマスカードキャンペーン&ミルクキャンペーンの報告

【カードキャンペーン】

カードキャンペーン全体では、ワールド・コロボ・フェスタや山里学童でのカードも合わせて 148 枚のカードが届いています。

(2007年11月16日現在)

★“ワールド・コロボ・フェスタ 2007”での

カードキャンペーン★

10月28日(日)、オアシス21で開催された“ワールド・コロボ・フェスタ 2007”の「チェルノブイリ救援・中部」のブース内で、カードキャンペーンを行いました。テントの中の机にカードの台紙やクレヨンなどの道具を揃え、そこでカードを作っていました。「道具は全て揃えてあります。



〈ワールド・コロボ・フェスタの様子〉

ウクライナの子ども達へ贈るクリスマスカード作りにご協力をお願いします！」と呼びかけると、子ども達が「作りたい!!」と言ってきて、テント内は 11 時から 17 時まで、常にいっぱい状態でした。

カードを書いてもらう時に「誰に、何のために贈るのか」を説明すると、「チェルノブイリに今も住んでいる人がいるの？」などという反応が返ってきて、悲しいけれど、事故のことは風化されつつあるのかなと感じました。カード作りは、子どもからお年寄りの方まで協力していただき、賑やかに楽しく進めることができました。70 枚のカードには、様々な想いが工夫して込められていて、チェルノブイリのことに関心を持ってもらえたという手応えがありました。(澤木)

★山里学童でのカードキャンペーン★

11月9日(金)、山里学童にクリスマスカードキャンペーンで訪れました。「11月初旬で、クリスマスカードを作るには少し時期が早すぎるかな？」と思いつつ、サンタの衣装と、ウクライナの民族衣装で子ども達の前に登場。笑顔いっぱい迎えてくれた子ども達を前にして事故の説明を始めると、子ども達の顔が真剣になっていくのがわかりました。私たちは、事故の詳細を伝えるのではなく、ウクライナには今も事故によって苦しんでいる人たちがいて、クリスマスカードを書いてそれを届けることで、元気をもらう人たちがいることを話しました。

説明が終わると、みんな一斉にカード作りに取りかかってくれました。次々と飛び出す子ども達のアイディアに圧倒されながら、心のこもった温かいカードが次々とできあがってきました。

カードを完成させると同時に「もう一枚作ってもいい？」と聞きに来る子が何人もいたのには、驚き感激しました。結果、その日、59 枚のカードが集まりました。

山里学童のみなさん、本当にありがとうございました。(田口)

【ミルクキャンペーン】

活動報告です。ワールド・コロボ・フェスタでチラシ配布による宣伝活動、チャリティーコンサート時に、カンパの箱を設置し寄付を募りました。2007年11月16日現在、ミルク代として 107,960 円のご寄付をいただきました。寄付してくださったみなさん、本当にありがとうございました。

【締め切り】12月12日(水)必着
【カードの送り先/問い合わせ先】
チェルノブイリ救援・中部
〒466-0822
名古屋市昭和区楽園町 137
楽園アパート 1-10
電話・FAX : :052-836-1073
(月水金 10:00~17:00)
E-Mail : chqchubu@muc.biglobe.ne.jp

4月に始まったナロジチ再生・菜の花プロジェクトは、順調に進んでいる。21年間荒野だったナロジチの汚染地に2ヘクタール(ha)の菜の花畑が出現した。規模は小さいが、未来を開く一歩になればと期待は膨らむ。8月にはナタネを収穫し、秋蒔きナタネ2haの播種も無事すんだ。来年のバイオエネルギー・プラント建設に向けて、準備が進んでいる。

● 菜の花プロジェクトに関わる現地の人々

現地でナタネの栽培と研究に携わっているのは、国立シトームル農業生態学大学のティードゥフ教授(放射線生物学)とその仲間の研究者らである。

ニコライさんは栽培担当の農業技師、モーシヤルさんは分析用サンプルの採取と調整、ピタリーさんは放射能の測定を行う技師でプログラマーである。実験助手のザスチュパスさんは分析用ナタネの調整係り、ミニアールさんは土壌サンプルの調整担当、ブルラックさんは土壌やナタネの化学分析担当、などである。春蒔きナタネと秋蒔きナタネ、土壌をあわせると分析用サンプルは約800検体にも及ぶ膨大な数である。

これらの人々が手分けし、あるいは協力して現場に赴き、栽培や分析を行う。ナロジチ地区で畑の耕作や種まき、農薬散布など栽培の具体的な作業を行うのは、汚染地域土壌管理ステーションの、ネステルチュク所長と農業技師のコロミエツさんその他の職員(人数?)である。そして、全体の事務連絡や管理を担うのはナロジチ地区議会副議長のプロコペンコ氏、全体の総監督はサブリュク、ナロジチ地区行政長である。また、このプロジェクトの資金管理は、従来から我々と緊密なパートナーであるチェルノバイリ・ホステージ基金のキリチャンスキーさん、ドンチェヴァさんの二人。

こうして大勢の協力の下、菜の花PJは船出した。我々を含め、関係する6つの組織、団体の間にはそれぞれの役割を明記した契約書が結ばれ、5カ年計画の目標が掲げられた。

● 春蒔きナタネの収穫

4月に蒔いたナタネは、播種後に雪が降ったり生育期に日照りが続いて成長が心配された

が、現地の人々の上手な管理で順調に成長し、8月はじめに収穫が行われた。当初、害虫被害が懸念され、1ha当り1t程度と考えられた菜種の収量は…肥料条件で異なるが、最適条件では…1.7tあり、予想以上の収量であった。

ナタネは肥沃な土地では1ha当り2~3tの収量があることがわかっており、それから見れば少ないが、この地域の土壌が強い酸性(ph3~5)の悪条件であることを考慮すれば上出来である。バイオマスの量は1ha当り5.7tであった。

種子とバイオマスはそれぞれ前述の汚染地域土壌管理ステーションに保管され、バイオエネルギーへの転換を待っている。

● 放射能の吸収と肥料条件

ナタネの種子やバイオマスの放射能分析はほぼ終わり、現在土壌の分析が行われている。部分的なデータからその一端を紹介する。セシウム137はカリウムと類似の性質を持つことから、カリ肥料は吸収を抑制すると予想されたが、結果は予想通りであった。種子への吸収量は、窒素とリン酸肥料だけの肥料区では種子1kg当り683ベクレル(Bq)だが、カリ肥料を与えた区では490Bqに下がった。こうした分析は秋蒔き菜種でも行われる。

この研究で初めて分かったこともある。ナタネの部位別にセシウムを分析すると、莖や莢(さや)などのバイオマスよりも種子に多くのセシウムが吸収され、莖や根などのバイオマス部分には種子の3分の1~4分の1の吸収に留まった。ストロンチウム90は逆に、種子よりもバイオマス部分に多い。

こうした基礎的なデータを蓄積しながら、次年度以降の計画、即ち「ナロジチでのバイオエネルギーセンター」建設に取り掛かる。(河田)

バイオディーゼル燃料製造装置

メーカー訪問記 (原 富男)



「菜の花プロジェクト」の2つ目の柱であるバイオディーゼル燃料（BDF）製造装置は、これまでアルプス開発に設計・制作を依頼することにしていましたが、様々な点で折り合いがつかず、独自プラントは断念せざるを得なくなりました。事態の変化に急ぎ事態を收拾するとともに、新たにパッケージタイプの製造装置

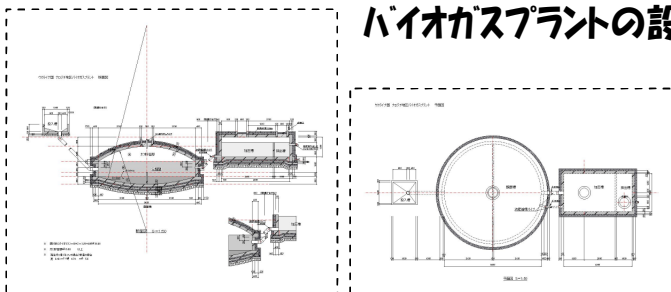
を調べることとなりました。

これまで通り、予定の処理能力は「150～200 ㍓/日」ですから、この処理能力に見合った機種を選ぶこととなります。大勢の人で調べられればいいのですが、比較的時間のとりやすい私と河田さんと調べまわっています。まず10月22日に東京に本社のあるS社に行きました。この会社の製品は全国一の販売量で、製造能力「100 ㍓/6時間」。特徴は小型で手作業が多いことにあり、福祉作業所などに多く採用されています。

翌日は、山形県のM社を訪問しました。この会社の本業は、自動車部品の設計製造ですが、山形大学の先生と協力して装置を作り始めたとの事。製造能力「200 ㍓/3.5時間」と製造時間が短く、7時間では400 ㍓製造でき半自動です。11月14日には、もう一つの東京のB社を訪問しました。この会社は日本で初めてBDF製造装置を製造した会社で、製造能力「100 ㍓/6時間」、特徴は省エネで、自然流下や室温反応のため時間がかかりますが、老舗だけにノウハウをもっています。この他にも、松山に本社のある会社の装置を調べる予定です。

これまで3社の装置を調べてきました。遠くにある会社でも必ず実際に稼働しているところを見せてもらい、それぞれの特徴や故障・メンテナンスなども聞いてきました。また、日本では廃食用油が原料ですが、今回の「菜の花プロジェクト」ではなたね油が原料のため、現地に装置を送ってからトラブルが起きてはいけないので、メーカーに現地のなたね油を使って試験製造してもらうことになっています。装置の大きさは、最大でも1.3m×0.9m×1.95mであり、非常にコンパクトです。中型の洗濯機2台程の大きさをイメージしてもらえばいいでしょう。現在、調べてきた装置の仕様などを比較できる資料が河田さんにより作られました。運営委員会やBDF検討チームで話し合うとともに、これら資料を現地に送り、現地サイドでの使い勝手を考えたり、実際の導入に向けた問題点を掘り下げ、機種選定をしたいと思えます。

バイオガスプラントの設計ができました。(原 富男)



「菜の花プロジェクト」の3つ目の柱である、バイオガスプラントの設計図ができあがりました。醗酵槽 37 m³、発生ガス量（夏 9.5 m³/日≒6軒分のガス）です。バイオガスの目的は、BDFを作った出た種皮や搾りかす茎など放射能を含む

バイオマスを、コンパクトに保管しやすくすることと、バイオマスからメタンガスを取り出して、エネルギーとして使うことにあります。バイオガスプラントもBDFと同じく、検討資料を現地に送り、現地の要望や実情にあわせた装置を作りたいと思えます。



<8月に赴任した、ブルシコフ・ウノドミール院長(27才)>

<ナロジチ地区中央病院支援報告>

ウクライナの中でも、特に甚大な被害を受けたナロジチ地区。地区から出る医薬品供給のための予算は圧倒的に不足しているとのことで、その地区の中央病院に対し、毎年医薬品支援を行ってきました。今年度も85万円を送金しています。この支援金によって、入院病棟の患者、またある程度は村落部医療施設(診療所)への医薬品供給はできているとの病院長の報告があります。

一方、今年9月、代表団がナロジチに赴き、新しく赴任したナロジチ地区中央病院院長(写真)と会談したところ、新たな要請がありました。「病院には資格のある検査技師がいるが、ラボの機器が充実していないため、結核の検体はジトームルに送っている」と、医療機器の不足を憂い、そして、「今年の医薬品の支援金残額で、双眼顕微鏡と自動計量器が買える。今年度の用途変更(医薬品から医療機器購入)を承認してもらえないか」との内容です。医薬品支援の重要さを念頭におきながらも、現場からの強い要請をチェル救・運営委員会で検討した結果、承認することにしました。

ナロジチ地区中央病院には、外務省の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」申請によってレントゲン装置が設置され、「被曝による免疫力の低下」と「貧困」によって結核患者の多いこの地区で大いに役立っていますが、その他の機器の老朽化と不足が問題点として報告されています。「医薬品支援を続けると、地区が支援をあてにして、医薬品代を出そうという自助努力をしなくなる。また、医療機器なら長期にわたって多くの人が裨益者となりうる」とのことで、ホステージ基金のキリチャンスキー氏は、「医薬品支援を打ち切り、ナロジチ地区病院への来年度の支援をこれら医療機器の購入に充ててはどうか」という意見をもっていますが、この件については、現地関係者の手による、外務省の「草の根…」への医療機器支援申請が可能かどうかを探り、また、現地の状況を確認しつつ、しっかり議論をして来年度の支援に反映していきたいと思えます。(山盛)

菜の花便り (その4)

今日12日は名古屋でも風が強く、冬を感じずにはられません。寒がりの私など、ストーブを点けようか迷っています。ナロジチでは秋蒔き作業も終り、キエフの竹内さんからは、雪の便りも聞こえてきました。これから数ヶ月、ナタネは土の中で耐え忍び、鶯(うそ)が鳴くのを待つのでしょうか。(注:鶯(うそ)…ウクライナの寒い冬に春の訪れを運ぶ鳥。チャリティーコンサートでこのタイトルの歌が歌われました。)

先月、大阪でのこと、4人のアメリカ人と話す機会がありました。ひょんなことから話はナタネプロジェクトの事となり、放射能がナタネに吸収され土壌浄化ができることを説明すると、一様に「そんな話ははじめて聞いた」と驚いていました。また、油には含まれないと言うので、「食用として使えるのか」と言うので、「そうだ」と言う(理屈的に)、すかさず少年が私に「you first」と言った時には、笑ってしまったのですが、遺伝子組み替え然り、大人は子どもに対して、取り返しのつかない遺産を遺しつつあるようです。ちなみに菜の花は Rape seed (略奪する種)。人は菜の花から油を奪い取り、菜の花は土壌から放射能を奪います。何につけても愚かなのは人ばかり。(榎本恭子)

グローバルフェスタに参加しました!! (小牧 崇)



10月6～7日、日比谷公園(東京)を会場に開かれたグローバルフェスタに参加しました。200を超す国際協力・支援に関わる国内の諸団体が一堂に会す大イベントでしたが、「救援・中部」も参加団体の一つとして出店したというわけです。

その成果は…? 「活動のPRという点ではますます、物品販売はいまひとつ」というところでしょうか。「わぁ!カワイイ」とウクライナグッズに目を留める若い女性はすいぶんいたのです。しかし、財布を開くまでにはいきません。やはり、千円を超すと手が出ない様子でした。

出展用のテントをシェアした相手は、「ピースウィングス・ジャパン」というイラクはじめ世界各地で支援活動をしている団体。お揃いのTシャツを着た若いスタッフが、移動用のスクリーンとプロジェクターを取り出して、てきばきと準備をしています。あとでその一人に伺うと、彼女はスタッフではなく学生ボランティアでした。この団体、予算規模は10億を超し、専任スタッフも海外を含め40名を抱えているらしい。とても比較の対象にはなりません。周囲の各団体の様子を見ても、揃いのTシャツを着たボランティアらしき若者が目立ちます。「我が救援・中部も、こうしたボランティア確保の努力もしなきゃね…」と話しながら、開店の準備をしたのでした。

一日目、午前はやや暇をもてあます時もありましたが、神谷さんがテント前で徹底的にチラシを撒いて、立ち止まって興味を示す人にウクライナの民族衣装をまとった榎本さんがにこやかに声をかけて引き寄せ、ウクライナグッズの紹介。さらに関心を持っていそうな人をテント内に案内し、中で待ち受けていた私が展示したパネルを使って、活動の紹介や「菜の花プロジェクト」の説明をするという流れができ、30人ぐらいの方に説明することができました。…どう考えても私が一番楽しめたわけですが。

圧倒的に反応が良かったのは若者です。逆に、チラシも受け取らないのは中高年男性に多かった。どうしてなのでしょう? 若者の関心のありようも多様で、男性では旅行先にウクライナを考えていたり、NGOのスタッフを希望する人。女性は菜の花や原発に関心を持つ人が多かった。しかし、いずれもチェルノブイリ原発事故の説明そのものが新鮮だったようです。考えてみれば彼らの生まれる前、または幼児の頃の出来事なのです。そして「菜の花プロジェクト」には、一様に強い関心を持っていただけたようです。

二日目も好天。昼頃には人出も増え、この日加わった池田さんも含め、4人総出でそれぞれ説明に当たることになって、初日の倍以上の方々にPRができたのではないかと思います。陽が傾きかかる頃になると、出店した他団体のスタッフやボランティアの方が増え、インドネシアでバイオマスエネルギー開発を行っているAPEXや、結核撲滅活動のリザルツのスタッフとは、情報交換も含めた交流ができました。団体名は聞きそびれたのですが、青いお揃いのTシャツを着た学生ボランティアに説明した後しばらくして、その仲間が2名「とても興味深い話だったと聞いたので」と、聞きに来てくれました。名古屋でもこんな展開になってくれればいいなと思ったものです。

いずれにしても、「菜の花プロジェクト」のPRに関しては手応えを感じた二日間でした。

2008年スタツア情報（第2弾）

先日来、旅行会社に「中部国際空港発の航空会社別の旅費見積り」をお願いしています。

今までに利用した航空会社のうち、比較的航空時間が短い、ルフトハンザドイツ航空とフィンランド航空は、20～21万円の航空券代ですが、近頃、新聞やテレビで報道されている「原油の値上げ」は、航空運賃とは別の「燃油」として加算されることになり、35,000円（2007年11月現在）の追加料金となっています。これに、ウクライナ国内の交通費と滞在費を合わせると、費用は30万円代になり、昨年のスタツア費用を上回ることが予想されます。

訪問時期は、BDFプラントとBGプラントがナロジチに設置され、また春撒きの菜の花が咲いている6月下旬頃なら、きっと参加される皆さんに喜んでいただけるのではないかと考えています。また、利用する航空会社によって、乗り継ぎ国が変わります。昨年のスタツアに参加された方から、「滅多に行けないヨーロッパで乗り継ぐなら、もう少し観光ができれば良かった。」というご意見があり、「ウクライナでのスタディが終わったら、乗り継ぎ国で観光をしよう！」という日程も考えています。

できるだけ安価な旅費にするため、各社の見積りを集め、今後も比較検討を進めていきます。せめて20万円代で…という、企画担当や運営委員の切なる願いは叶うのでしょうか？（美）

小さなお店をだしました！（チェルノブイリ救援・一宮 つぼみを守る会）

近頃流行の「ワンボックスレンタルスペース」が一宮に登場。藍染の古布の小物、ハーブグッズなどをならべてみました。

ポーシェの読者、杉浦さんのテディベアやパッチワークの作品など、いろいろ素敵なものを揃えています。

電子レンジで2分ほど暖めて、繰り返し使える（湯たんぽのような）気持ちいい暖かさの保温袋や、ラヴェンダーのアイピローが人気です。古布をあしらった帽子やエプロンなども、只今製作中です。古い着物のリメイク作品も出品する予定です。

ミルクキャンペーンの時期だけでなく、通年出店したいと思っています。ご家庭で眠っている、ごく小さな不要品や手作り作品（なにしろ棚一段だけのお店なので…）をお寄せいただくと幸いです。お買い上げもよろしく願いいたします。

クリスマスカード用の使用済み切手も併せて、ご協力お願いします。

★お店の場所：一宮市本町二丁目 4-37 / 市役所西庁舎北側
糸小さんの隣の「ちゃらん家（け）」

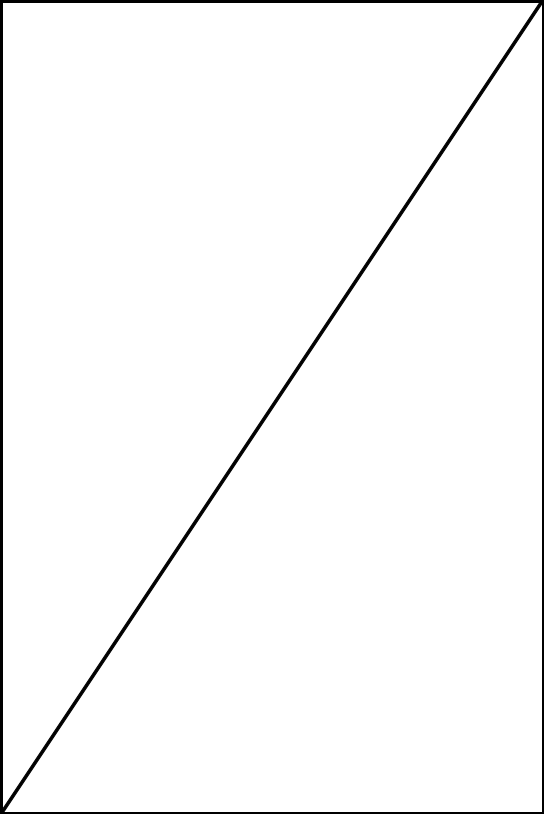
★お問い合わせ：〒491-0057

一宮市今伊勢町宮後字東茶原 37（0586-46-0263）中島しぐれ まで



NPO法人チェルノブイリ救援・中部 2007年度上半期収支報告書

(2007.4.1～2007.9.30)

収入の部	
項 目	金額(円)
救援寄付金	1,906,112
個人	1,764,112
団体	142,000
運営費関連寄付金	187,000
個人	187,000
団体	0
菜の花プロジェクト寄付金	11,951,751
ボランティア貯金助成金	4,000,000
地方公共団体助成金	0
民間団体助成金	500,000
雑収入	31,715
受取利息	9,086
	
当期収入合計	18,585,664
前期繰越収支差額	8,833,242
収入総額	27,418,906

支出の部	
項 目	金額(円)
事業費	7,054,888
医療機関支援事業費	850,000
医療機器提供事業	850,000
医薬品提供事業	0
保健事業費	620,000
粉ミルク提供事業	620,000
被災者団体等支援事業	1,100,000
業務委託費	499,996
奨学金事業費	0
特別事業費	1,969,630
派遣事業費	1,236,341
駐在員費	299,951
支援輸送費	0
文通・クリスマスカード事業費	0
海外監査費	0
通信誌発行費用	462,445
国内監査費	0
キャンペーン	0
イベント関連費	16,525
管理費	1,652,874
給料手当	781,500
荷造運賃	0
印刷製本費	150,300
旅費交通費	155,210
会議費	5,700
通信費	132,748
消耗品費	53,043
修繕費	0
水道光熱費	11,497
支払手数料	47,187
為替差損	0
諸謝金	16,000
諸会費	33,000
新聞図書費	0
租税公課	1,500
地代家賃	259,689
雑費	5,500
当期支出合計	8,707,762
当期収支差額	9,877,902
次期繰越収支差額	18,711,144
支出総額	27,418,906

上記期間の収支報告書を監査した結果、異常なく正當に処理されていることを証明します。

平成19年 10月 26日 監査人 安田 哲司

今年度上半期の中間決算を、ここにご報告いたします。

今期の特記事項としては、収入の部に新しく「菜の花プロジェクト寄付金」という項目を付け加えました。今後も、大事業計画である「ナロジチ再生・菜の花プロジェクト」に対する収入・支出面での会計処理が増えてくると思われます。みなさまの貴重なご支援に支えられ2007年度上半期収支報告書の監査を10月26日に終えましたことも、併せてご報告いたします。 (綾部)

<奨学基金報告>

奨学生については、「ポレーシェ 95 号」紙上で、2007 年以降新規採用はしない事を報告しましたが、9 月代表団が帰国し、「医科大・歯科大の奨学生—ネーリヤ・アタマンチュクさん、フェリク・クリヌィチコさん、ナターリヤ・ミハーエヴァさん—3 名がインターンになり、収入を得ることとなったので、奨学金供与は打ち切り、その代わりに看護大の学生—リュドミーラ・アントニョクさん—を奨学生にできないか」という相談を受けたとの報告がありました。この学生は、コーラステン地区の貧しい村の出身で、医科短大を卒業後、看護大に入学したけれど、キエフで生活するのは財政的に苦しいとのこと。この件につき、運営委員会で検討し、彼女への奨学金供与を決定しました。しかし、その後、キエフ医科大のミハーエヴァさんは 2008 年 6 月まで学業が終わらず、奨学金供与は継続するとのこと。その分、アントニョクさんは奨学金の支給期間が短くなるわけで、その旨了解してもらったとのこと。現在奨学金を受給しているのは、医科大 1 名、看護大 1 名、医科短大 4 名、農大 15 名、国立大 8 名の計 29 名です。 (山盛)

事務局便り

今年も残すところ一ヶ月あまりとなり、月日の経過が年々早く感じる今日この頃です。2007 年はチェル救にとっては、大事業計画「菜の花プロジェクト」の成功に向けて盛り上がった一年だったと思います。今後も継続して 5 年間、進めていかなければなりません。新聞社各局の取材訪問や救援のためのお問い合わせもあり、東京と名古屋での「イベント参加」「チャリティーコンサート」などの広報活動を通じて、その反響は確かな手応えを感じています。そして今年も、事務局にはたくさんの方々の、ご寄付・ご協力・ご支援を色々なかたちで寄せていただきました。

本当にありがとうございました。みなさまのこうした支えや想いを、被災者の方々にお届けできるようにこれからも頑張ります。

話はかわりますが、最近ふと目にした言葉に気持ちが少し軽くなったような…。 (綾部)

「今日という日は、自分の残された人生の初日だ！」(小椋 佳)

編集後記

☆冬のコートの着始めは、いつもクリーニングのタグが付いたまま。毎年人から指摘されてようやく気づく。そそっかしさを克服するために人生を費やしているような気がする。(佳)

☆睡眠不足が続くと、次第に気分が落ち込み「抑うつ的」になるらしい。仕事の量や内容、人間関係から生まれるストレスは、「毎日、良く眠り良く食べて未然に克服！」とは言うものの、良く食べ過ぎると…要らぬストレスが増えるから、気を付けなきゃね。(美)

☆大手建設会社や設計事務所による手抜き工事や耐震設計のごまかし、各種食品メーカーによる原材料の不当表示や賞味期限のラベルの貼り替えなど、今、品質保証に対する「偽装」が大きな社会問題となっている。今回の浜岡原発運転差し止め訴訟における静岡地裁の判決は、まさにこの流れに逆行したものである。自ら悔い改めて強化した耐震設計指針や、中越沖地震で明らかとなった刈羽原発の損傷などを踏みにじて、なお大丈夫と言い張るのであれば、もはや現在の原発は、白昼堂々と「偽装」していると言わざるを得ない。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473